

思うがままに ④

# 諸々二話

和田 明

機関誌「こうたいきょう」第37号に、大学校友会の事を綴ったが、もう少し加筆したい。高校同窓会から「在校時の担任の先生方と一緒に懐かしい一時を過ごしたい」と案内があった。彼等は、58歳、話題の豊富な年齢である当時のホーム主任10名中、健在6名、応じられたらどうか。

校友会活動は、なかなか難しい。今年のわれわれの校友会総会は、会長と私の2名のみであった。もう一つの大学校友会は、支部長は、選任されているが、年会費納入者は、1名のみ、来年高考母校が100周年を迎える記念誌に原稿を送信したら記念誌は発行しないとの事。財政面であらうか。

これらの現状と、高退協を比べてみると、高退協は、倉橋会長以下13名の役員が実に30の分野を分担し、活動している。頼もしい限りである。さらに地方議員にも進出した。

今年も多くの話題が沸騰した、北朝鮮、政局の問題は、高退協会員の専門家に譲るとして、身近な話題「大川村」について、私は、瓶ヶ森林道へ山岳ドライブをした時、帰路は大川村を通ることにした。土佐はちぎん地鶏、大川黒牛肉もまだ手にいれてない。

高知教職員山の会が5月に解散した。私は、この会の例会案内を楽しみにしていた。

宝来山(仁淀川町安居溪谷)



例会の山と、自分の登山力を計り、登れる山なら下見登山をした。今、一番思うのは、22名の会員中、10名前後の例会に参加していた方々は、単独登山、グループ登山を続けているだろうか。来年1月9日、皿ヶ峰初歩きでお会い出来ればと願っている。

## いこの風にかかれて③ 何でも早い うちから...

山崎 きよ

最近、近所に幼児からの英語塾ができたらしく、家に「英会話の体験教室が無料でありますので、来てみませんか」と若い女性が風船を持って訪問してきました。「うちの子は全く興味ありません」と断りましたら、次のお家へ移っていきましました。なぜ

## 先達の教えから さあまた始めよう!

飯田 清久

3

ずいぶん前のことです。「つくし」の暖簾をくぐるという別役さんが、「飯田君いいものがあるからみてみや」と緑色の冊子をくれました。「るねさんす221号」(1973年6月復刊第1号)です。冒頭に掲載されていた「仲間を信じるー活動のしかたを新しくー」(横田慧氏 著)を、飲むのも忘れてむさぼり読んだことでした。仲間づくりや組織活動そして社会の民主的変革の運動にかかわる法則と応用、抽象と具体、原則性と柔軟性などをキーワードに、働く仲間への信頼と回結への確信を述べたヒューマニズムあふれる論文でした。

「愚直に政策を語る」といながら国民と憲法を愚弄する首相、劇場野党のブームを狙った保守政党のさらなる選別と右翼再編、都合の悪いことはだんまりを決め込み選挙用に準備された耳触りの良い政策、こんな報道に接していると、日々のニュースを見る気が

子どものいる家が分かるのか不思議ですが。もうすぐ小学校で英語が教科になるので、その関係でしょうか。

2020年度から小学校で歌やゲームに親しむ「外国語活動」を3年生から引き下げ、5・6年生については教科化し授業数が増やされることになりました。まだ2年半の準備期間がありますが、英語教諭免許を持たない小学校教員が多くいるもので教科にできるのかという問題や、3年と6年生で各学年35コマずつふえる授業時間をどう確保するのか等、課題が山積しています。先行自治体の教員からは、塾通いを増やし家庭の経済力による格差が生まれる、かえって英語嫌が増える、等の指摘もされています。

すでに授業時間確保のため夏休みを短縮した自治体もあると、いつかテレビで報道

なくなりそうでした。でももう一度自分なりに大切に生きてきた「大事なものを」を見つめ直し確かめる機会でもあったと思います。中央政界のセンチシヨナルな動きとそれを伝えるメディアにとすると目を奪われがちになりますが、ちよっと待てよ！私たちがそんなこと望んでない！の思いは、確実に地域の民主主義を求める声として広がり、さらに市民や地域の共同を前進させるエネルギーを育んだのではないのでしょうか。中央政界がどう動いても地域をなめたらいかん、今日までコツコツ培ってきた共同の力をなめたらいかんぜよ！といった気持ちです。憲法を守る、平和を守る、立憲主義を取り戻す、安倍政治にストップをかけるという大きな目的。そしてそれを実現するために、幅広い人たちによる共同を前進させる営みは、高知でそして全国各地で取り組まれてきたこと

されたであろう。全国各地で創りだされたであろうこれら共同のドラマをていねいに振り返り

されていきました。それを見ていた小4の娘は「お母さん、夏休みはなくさんといて」と訴えました。どう考えても子どもにとって負担は増えます。授業時間の確保の方法は各教育委員会で決めなさいという文科省の無責任ぶりに腹が立ちます。

私は議会で、いの町はどうするか質問すると、「2年前倒して来年度から教科にします」との答弁。それが子どもにとって最善の方法という結論らしい。親や子どもへの問いかけもなく進めることが果たして最善かと思うのですが。ただ私も教育の専門家でもありませんので、自信はありません。何でも早いうちから始めれば、身に付きやすいというのはスポーツなどでも言われています。英語も早くから始める方がいいのでしょうか。もう少し、このことは勉強していきたくと思っています。

教訓を導き出していくことが、次の闘いへの確かな基礎体力になっていくのだと思います。これからさらに新しい情勢のもとで、憲法と平和を守る闘いが始まります。

前述論文の中で、示唆に富んだ文章があったので要約を紹介いたします。40年以上前の論文が示す法則性や原則性は、今日にもピタッとはまってしまうようです。

「激突する闘争だけが人を変えたのではありません。それに先立つ無数の物語があります。今日の「静か」に見える、その底にうごめいている幾千の尊い努力。日常の目立たない変化の中に次の飛躍が用意されています。この静かな努力を集め、その飛躍の法則を探り、失敗を戒めとし、お互いの前進を確かめ、それに加速度を与えるために助け合うのが私たちの組織だと思えます。」今あらためて、しっかりと踏みしめたいと思えます。

アンコールではありませんが奮闘する編集部的重要なお応えして、あと2回ほど拙稿におつきあいください。